

金賞 小学生の部

「日本人のおもてなし」

焼津市立黒石小学校 五年

岩崎 真夕

二〇二二年夏、異例の東京五輪が開催されました。コロナ禍の五輪、一年延期に加え、大半の大会が無観客となりました。開催に反対の声も上がる中、ボランティアを辞退する人も多く出ました。しかし、開催されると決まった以上、開催国である日本が、全ての人を歓げいし、もり上げなければならぬと私は思いました。

五輪の招ちで注目された「おもてなし」。これは心をこめて客に対応することの他に、表裏なしという意味もこめられています。言動と内心に食い違いが無く、心のままに相手を思う気持ちがおもてなしなのです。今回の五輪を見てきて、日本人のやさしい気持ちと「小さな親切」がいろいろな場面でおもてなしとなり表れていると感じました。

テレビで、外国人記者が日本のおもてなしについて語っているのを見ました。朝も晩もホテルで会う人全員がていねいにおじきをしてあいさつをしてくれたことによるこんでいました。私達の日常では人にあいさつをすることは当たり前前だけれども、その外国人記者にとっては、心のこもったあいさつが特別だったのだろうと思います。

また、アイルランド代表の選手がキャンプ地スタッフからの出発時の見送りに感激していました。この選手は「幸せを感じているし、これから始めるのが楽しみ」とつぶつぶっていました。スタッフみんなの送ったエールがしっかりと届いていたのだと思います。

さらに、テレビでのインタビューに答えた外国人は、「もし、特別な金メダルがあるとしたら、この五輪に関わった全ての日本人にそのメダルをあげたい」と言ってくれました。そして、どの選手も、必ず感謝の言葉を口にしていました。ボランティアの人達や関係者の人達は選手一人一人のことを思って、今できることを精いっぱいやってくれたのだと思います。決して特別なことではなくても相手を思いやる心が人々に伝わると「ありがとう」が生まれるのだと思いました。

言葉も文化もちがう様々な国の人達が五輪を通じて、日本のおもてなしの文化にふれることができたと思います。日本人一

一人が行った「小さな親切」が世界の人々に伝わっていたのが私はとてもほこらしく思います。

閉会式、「ありがとう」という文字が最後にうつされた時、日本人から世界へ向けたメッセージであると共に世界から日本に返された感謝の気持ちでもあったように感じました。おそらく今回五輪で日本に来た世界の人々は、

「ありがとう」という言葉を一生忘れないでいてくれると思います。

「親切の輪っか」

浜松市立与進小学校 四年

清水 理々

「お先にどうぞ。」

少し前、お母さんとお姉ちゃんで行った、ショッピングモールのエレベーター前で、お母さんは、そう言った。相手は、ベビーカーに乗った小さな子どもと、そのお母さんだった。私たちの方が、先にエレベーターが来るのを待っていた。まだかなー、と言ったりしながらしばらく待った。そして、やっとエレベーター

ターが来た時、その家族が来た。たくさん荷物をもって、子どもに乗ったベビーカーをおしていた。見た感じ、とても重そうに感じた。私は、そのすがたを見て、何も言えなかった。私たちも、つかれていて早く帰りたいのだ。けっきょく、エレベーターには乗らないで、少し遠まわりだったけれど、エスカレーターでおりた。なんで、あの時お母さんは、言えたのだろうか。

ずっと気になっていた私は、別の買い物のに、このことの話をした。するとお母さんは、こう言った。「私たちも、昔よく、助けてもらっていたんだよ。重い荷物をもってくれたり、レジをゆずってくれたり、バスとか電車の中で席をゆずってもらったりしていたんだ。」この事を知った私は、あの時の気持ちを、後悔した。自分のことばかり、考えていたかも知れない。お母さんの言葉には、まだつづきがあった。「昔、助けてくれた人たちは、たまたま会った名前も知らない人で、直せつお返しはできないよね。だから今度は私たちが、同じような人を見つけたら積極的に声をかけて、助けてあげる。そうすると、おん返しになるんだと思ってやっているよ。」親切の輪っかだな。私は、そう思った。

ふだん私も学校で、進んでいいことをするようにしている。なぜなら、先生にほめられたいし、友達にもすごいねと、言わ



金賞

りたいからだ。家でも、お手伝いをよくする。たくさんするとごほうびに、お小づかいをもらえるし、お母さんがよろこんでくれるのがうれしい。だけど、「親切の輪っか」は、何かお返しをもらえるわけではない。親切な気持ちで、どんどんつながっていく。これは今まで私が思ったことがない考え方だった。とてもすてきだなと思う。

私は、今までの親切もつづけていきながら、これから「親切の輪っか」でみんなもいい気持ちになるようにしていきたい。今度また、前と同じようなだれかがこまっている場面があった時には、自分から助けてあげられるような気がする。

小さな正義

静岡市立大里西小学校 五年

柳原 琉力

「えらい！とっても良い事をしたね！」

そう言って、母がぼくの頭をなでてくれた。そしてギュッと抱きしめてくれた。そのしゅん間、ぼくの判断は間違いではなかったのだとホッとした。

昨年の三月三日の事。ひな祭りだった。ちらし寿しとひし形のゼリーの給食がおいしかったな。ぼくはそんな事を思いながら、友達二人とききよう公園を横ぎり下校している。公園を出た所の大通りで、パトカーやハッピーセットのおもちゃを手を持った三才位の青い服を着た男の子が、一年生を追いかけていた。ん？何か？変だな。あやしいなあ。

「ちよつとぼく、一人？お父さんかお母さん近くにいますの？」

そう声をかけたとたんに、男の子は手に持っていたパトカーのおもちゃを歩道に落とす。あわてた様子で男の子がおもちゃを拾いあげた後ぼくはもう一度ゆっくり彼に聞いてみた。

「あの一年は友達？」

すると男の子は笑って、

「あれ、お父さん！」

と返事をした。あやしい。

辺りを見回したが周りに大人らしき人はだれもいなかった。

「だれと来たの？おうちは近く？」

ぼくはあわてて色々聞いてみたが、もう男の子は答えることもなく、ただただ笑っていた。友達の一人が、

「ぼくゴリラ君だよ。」

と変顔をして彼をさらに笑わせようとしてくれた。そのすぐわきの道路を大型トラックやバイクがゴーツと走り去って行く。

ぼくはもう一度周りをキョロキョロ見たした。するとベビーカーを押した女の人が歩いて来た。だれかを探しているようには見えなかったがもしかしたら…と思えばくは手をあげ叫んだ。

「あのー、すみません！この子のお母さんですか？」

「あ、そうです。あーもうーこんな所にいたの？公園で待ってって言ったじゃん！」

そう女の人は言って男の子に怒りだした。

「ありがとうございます。」

と言われたので男の子を引き渡し家に帰り出したが後ろから男の子の泣く声が聞こえて辛くなった。ぼくはふり返る事が出来なかった。

歩きながらずっと考えてしまった。今回の事はお母さんが悪かったんじゃないか、という事。あんな小さな子が一人で待てるわけないだろ。もし道路に飛び出していたら事故にあったかもだし、迷子になっていたかもしれないのに。ぼくの心はモヤモヤしていた。

帰宅しすぐに今の出来事を母に話した。すると母は驚いた様子だったがその後につこり笑って、ぼくのした事をたくさんほめてくれた。そしてぼくの考えにうんうんとうなずき、

「ママもそう思う。守ってくれてありがと。」

と言ってくれた。モヤモヤが一気に晴れた。



金賞 中学生の部

「迷子になったおかげで」

静岡市立豊田中学校 二年

岩田 陽和野

「どうしよう。完全に迷っちゃった。」

友達と遊んだ帰り道、私は道に迷ってしまいました。通りすがりの人に道を聞こうとしましたが、人見知りで知らない人に声をかける勇気がなかった私はその場に立ちつくしてしまいました。

「どうしよう。このままじゃ家に帰れない。何とかしなきゃ。」
そう自分に言いかけせ、近くにいたおばさんにやっと声をかけることができました。そのおばさんは、

「大丈夫。私が見つかる道に出るまで連れて行ってあげるから。」
と言って一緒に歩いて道案内をしてくれました。歩いている最中でも、「今日は何して遊んだの?」「楽しかった?」など、たくさん話しかけてくれました。そのおかげで、だんだん不安な気持ちもなくなっていききました。

数分後、分かる道についたので、

「ありがとうございます。本当に助かりました。」

と、言葉では伝えきれないほどの感謝の気持ちを自分なりに伝えると、

「いいえ。分かるところまでつけて良かったね。家まで気を付けて帰ってね。」

と言っていなくなっていました。

言葉で説明するだけでも良かったことをわざわざ、一緒に歩きながら教えてくれてすごくうれしかったし、歩いているときも、私を気遣う言葉をたくさんかけてくれて優しいなと思いました。そして、次は自分が困っている人を助けたいと思えるようになりました。

おばさんに助けられて数ヶ月たったある日、私は一人で近所のショッピングモールにお使いに行っていました。たまたま立ち寄ったお店で、小さな男の子が泣きながらお母さんを探して歩いているのを見つけました。

「見て見ぬふりしちゃいけない。自分から声をかけて助けてあげないと。」

勇気を出して私は男の子に声をかけました。その男の子は泣きながら、お母さんとはぐれてしまったことを話してくれました。私は、インフォメーションセンターに連れて行ってあげること

にしました。連れていく最中にも、おばさんにしてもらったように声をかけながら行きました。インフォメーションセンターに着くと、男の子のお母さんがいました。するとお母さんが、「わざわざ連れてきてくれてありがとう。本当にありがとう。」とたくさん感謝を伝えてくれました。私はとてもうれしかったです。おばさんと会ってから私は「自分から困っている人を助ける」という事を意識できるようになりました。自分から行動するのは勇気のいることだけど、自分が行動することで誰かが笑顔になるのが幸せな事だと気づいたので、これからも困っている人を助けたいです。

あの時、道だけでなく、私にとって大切な事も教えてくれたおばさんに感謝しかありません。

父の親切と僕の親切

島田市立六合中学校 二年

杉山 咲太

僕の祖母は身体が不自由です。昔、脳梗塞をしたそうで、右半身が麻痺していて言葉もうまく話すことができません。

年齢的にも遠出が大変になり僕の家に来ることもなくなり一年に何度か僕たち家族が帰省する時に会うだけになってしまいました。今年のお盆は、三ヶ月振りの帰省でした。

僕たちが着くなり「いらっしやい、よく来たね。」と祖母は嬉しそうに言います。玄関には初めてみる杖がありました。二月に骨折をしまい歩くのがやっとで散歩にも出れなくなったと聞いていたので、杖をみて少し歩けるようになったのだと思いました。祖母は何気ないことにも感謝の気持ちを忘れず、いつも「ありがとう。」と言っています。風呂掃除や食事の支度をする母に「助かるよ。」と言います。庭の草取りを二十分しただけの僕にも何度も「ありがとう、嬉しいよ、気持ちがいいよ。」と言います。しかし、父はあれもこれも手伝おうとしません。玄関から外に行くのがかなり大変そうだったので、父は隣にいて全然助けず見ているだけでした。その間も祖母は手すりをつかんで立ち上がるうとしますがなかなかうまくいかず、何度かくり返してやっと立ち上がりました。その時「親切」って何だろう？と考えました。僕は人に優しくすることが親切だと思っていたので、父の行動は冷たく不親切に感じたのです。僕は母になぜ父がそのような行動をとったのか聞いてみることにしました。すると母が「何でも手伝ってしまうと筋力がどんどん落ちてま



金賞

すまず身体が大変になってしまし、家事を全部やってしまつたら何もできない自分は必要ない人間なんだって思つてしまうから、あえてがんばってもらうって思うよ」と言いました。それを聞き、何でもやってあげることが親切なのではないかもしれないと思ひました。それから父をみてみると、介助はしないけれどそばにいて本当に大変な時には「大丈夫」と言つて支えたり手をひいたり、「がんばれ」と応援しながら待つ姿がありました。またものの位置を変えたり使いやすい高さにするなど祖母が少しがんばればできるような工夫をしていました。それを見て、本当の親切というのは、僕がしたいことをしてあげるのではなく、相手のしたいことやしてほしいことに寄り添うことなのかなと思ひました。

親切は難しいです。人に声をかけるのにも勇気が要ります。しかし困っている人をみかけたら声をかけて小さな親切を積み重ねていきたいです。



小さな親切、広がる世界

静岡県立浜松西高等学校 中等部 三年

高村 日紀

毎日利用する通学路。自宅から学校までの二キロ弱、徒歩三〇分程の道のりだ。入学した当初、ずっしりと肩にのしかかる重たい通学バッグを背負い、黙々と校舎のある高台へと足を運んでいた。その頃の自分は必死で歩くあまり、周りの世界に目を向ける余裕などなかった。

街路樹の銀杏の色が変わり始めた頃、学校生活にようやく慣れてきた僕は、朝の街の風景や行き交う人々に興味を持ち始めた。停留所でバスを待つサラリーマン。犬と散歩している老人。友だちと一緒に通学している元気いっぱい小学生。同じ場所で同じ時間に決まって出会う人々。しかし、時折違う場面に出口くわすこともある。

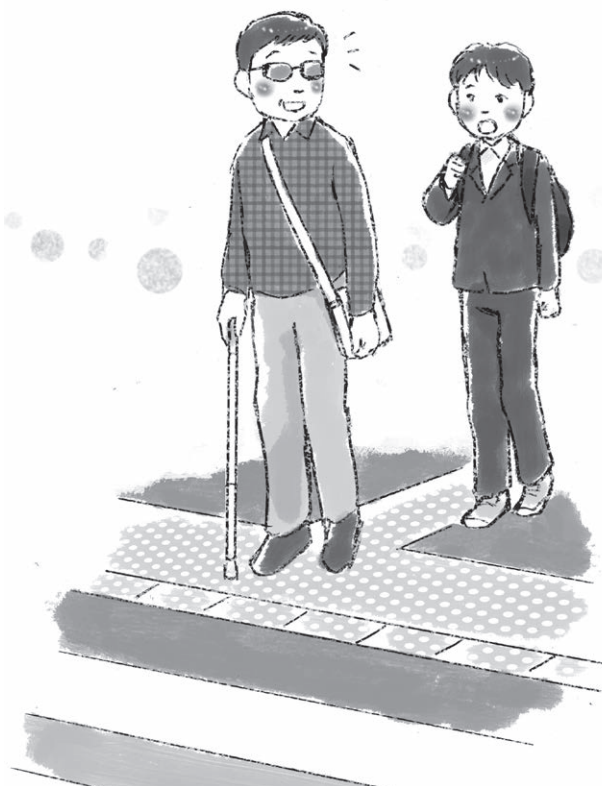
僕が信号待ちをしていた時だ。気づくと傍らに白杖を持った視覚障がい男性がいた。格好から職場へ向かう様子だった。その男性は信号が青になっても横断歩道を渡ろうとしなかった。ので「青信号になりましたよ。」と声をかけた。すると男性は

「車が来るのが怖いから、次の信号で渡るね。ありがとう。」と、優しく丁寧に答えてくれた。朝の時間帯は通勤する車が、帯のように連なっている。心なしかスピードもでていいる。視覚に障がいを持つ人は聴覚が優れている人がいるというが、実際は日頃、人一倍、音に敏感で集中していると思われる。交通量の多い時間帯は車の音も恐怖に感じるに違いない。耳で見る世界はどんな世界だろう。いくら通い慣れた道とはいえ、安心はできない。近年、様々なユニバーサルデザインを街角で見かけるが、世間は果たして障がい者にやさしいのだろうか。私たちは障がい者を意識した行動をしなければならぬ。つまり、意識を変えなければ、やさしい社会は作れない。初めての経験から、声をかけることが精一杯だったが、どうして「一緒に渡りましょう。」と、もう一声かけることができなかつたのかと後悔した。

何気ない短い会話だった。しかし、男性の「ありがとう。」という言葉に嬉しくなり、その日一日気分がよかつた。それから、しばらくして自宅の近くでその男性を目撃し、あの時の高揚した気分が蘇つた。色々なことを気づかせてくれた男性に感謝を述べるのは僕の方だ。今度は一緒に横断歩道を渡ろうと思う。

小さな出来事ではあつたが、自分の世界が広がつたように感じた。そして学んだ。今思うと、一心不乱になり通学していた

頃の自分は、あの男性に声をかけただろうか。存在に気づくことすらなかつたかもしれない。周りに興味を持ち、少し目を向けるだけで、昨日までの世界は変化する。親切とは、そこから始まるのかもしれない。そして、自分を成長させてくれるのだ。



銀賞 小学生の部

「小さな親切」

静岡市立千代田小学校 六年

佐藤 ひなの

私がこの作文に挑戦しようと思った時、まず小さな親切とは何かを考えた。幼い頃から「人に親切にしましょう。」と教わってきたので、私なりに親切にするように意識してきた。でも親切ではなく「小さな親切」とは何かと考えるのも何も浮かんでこなかった。そこで両親に聞いてみると「小さな親切、大きなお世話」と口をそろえて言ってきた。私はこの言葉を不快に感じた。そして父は、

「これは昔によく言った言葉だよ。」

と言ったあと話を続けた。自分が良かれと思ってやった親切は、必ずしも相手の全てがうれしいと思うとは限らないこともある。実はそれをして欲しくなかったと思うこともある相手もいる。親切はその紙一重であると教わった。また父の好きな相田みつをの

言葉で「親切と言う名のおせっかい、そっとしておく思いやり」という意味を考えた上で、自分の思う小さな親切を書いてもらいと言われた。それを聞いて、私はすぐに思い当たることが浮かんだ。

去年のことだった。私の学年ぼうしは黄色で、ある日そのぼうしを失くしてしまった。それを聞いた仲よしの友達は、ずっと一緒に探してくれた。教室の中や他の子のぼうしの名前を一人一人確認したりと、本当に一生けんめいに一緒に探してくれた。授業の合間と給食後の休み時間、それを一週間ほど続けた。その友だちとはクラスが別々で、時々一緒に下校していた。ふとした時、私は気がついてしまった。その仲良しの友だちがかぶっているぼうしが私の物であることに。黄色のぼうしの所に黒いしみがある。私が前に書写の時に付けてしまったすみが全く同じ場所に大きく付いている。私のためはずっと一生けん命探してくれた仲良しの友だちがかぶっているのは、私の物にまちがいない。

私は言えない。「それ私のだよ。」という簡単なセリフだけでも言えない。

父が教えてくれた「そっとしておく思いやり」。今思えば言わないのも親切なのかなあと思っている。はっきり言う勇氣がなかっただけなのかもしれない。言えない日が続く、母が新しいぼうしを買ってきてくれた。

私はだれかが困っている時、仲良しの友だちのようにあんな

に一生けん命に何かをしてあげる優しさがあるのだろうか。
道に迷っている人、重い荷物を持っているお年寄り、倒されて
いる自転車、めいわくなゴミ、私に出来る小さな親切は、意
外と身近にあることに気づいた。

小さな親切が大きなお世話になる区別は、私にはまだ分か
らない。でも「小さな親切」を行動しなければ何も始まらな
い。自分自身もみがけない。失敗するかもしれないけど、まず
は行動してみようと思う。一つ私がこの作文から分かったこと
は、親切も小さな親切も決して見返りを期待しないことである。

広がれ！小さな親切の輪

浜松市立和地小学校 六年

鈴木 桜

私の高校生の兄は病気で二年前から車いすを使っています。
私はそれまで体の不自由な人がどれだけ大変なのか分かってい
ませんでした。

兄が部活の大会を見に行った時の話です。試合場所へ行こう
と母が兄の車いすを押して体育館のスロープを登ろうとしまし

た。けれど、スロープから入り口の手前まで学生の靴がびっし
りと並べられていて、立ち往生していたそうです。靴を移動し
なくては…と母が車いすを端へ寄せようとした時です。一人の
女子高生が走ってきて、ものすごい勢いで数十足の靴を兄が通
れるように移動してくれたそうです。試合中でほとんどの人が
外の様子など気にも留めておらず、外の人も自分達のやる事に
集中していたそうです。そんな中で気付いて手伝ってくれた女
子高生に母はとても感謝し、何度もその話をします。

私は、今では車いすに乗っている人がどれだけ大変か分かる
ので、すぐに手を貸せるようになったと思います。でも前はし
んどさが想像できず、動いているから大丈夫だろうと気楽に考
えてしまっていました。きっと助けてほしい人もいたと思うの
に、恥ずかしいから声もかけられませんでした。なんて薄情だっ
たのかと後悔しています。体が不自由だとほんの小さな段差も、
少しの角度の坂道も、想像以上に大変です。一人では移動が難
しいので、兄は色々な所へ行くのを諦めることが多いそうです。
でも、学校では友達が助けてくれて、いつもとても感謝してい
ると言っています。友達は、
「大した事じゃないから気にすんな。」

と言ってくれるそうです。友達には大した事ではなくても、兄
には大きな助けです。私は本当に有難いと思っています。



銀賞

家族や友達でなくても親切にしてくれる人はたくさんいます。エレベーターのボタンを車いすが出るまで押して待ってくれます。私もベビーカーなどを押している人がいたら、乗り降りの間はボタンを押して助けたり、道を譲るようになりました。「ありがとう。」

と言われるとうれしくなります。

私は周りを見るようになって、大変なのは車いすの人だけではないと気付きました。様々な事情の人が小さな親切や助けを必要としていることが分かりました。自分ができるのはまだ小さなことですが、思いやる気持ちがどんどん広がればいいなと思います。いつか私もあの女子高生や兄の友達のように、困っている人がいたらすぐに行動できるようにしたいなと思います。

これって親切なのかな

函南町立西小学校 三年

長澤 旺佑

ぼくが三年生になる前の春休みに、家族でショッピングモールに行きました。四月からはくうわばきと、えんぴつ

を買ってもらいました。他の物も色々見て歩いたら足がつかれて、のどもかわいてきたからお父さんに、「つかれたから休みたーい！」

と言ったら、

「少し休けいしよつか。」

と言ってフードコートに行きました。ちょうどお昼の時間も近かったので、お昼ご飯も食べるようになりました。ぼくたちのとなりのせきに、ベビーカーに乗っている赤ちゃんの家族がすわっていました。ベビーカーの上においてあった、赤ちゃんの服が落ちました。でも赤ちゃんの家族は気がついていません。ぼくの家族もお店に並んでいて、せきにはぼくしかいなかったのので、(お母さん早く戻ってこないかな)とソワソワしていました。ぼくは、床の上はきたないし、誰かにふまれたらかわいそうだなあと思っていただけ、「落ちたよ」と教えてあげる勇氣がありませんでした。赤ちゃんの家族に気がついてほしくて、ぼくは床に落ちた服を何回も見ていただけ気がついてくれませんでした。そのとき、お母さんがぼくが注文したラーメンを持って帰ってきて、すぐに落ちていた服に気がついて、「落ちていましたよ。」とひろってあげました。赤ちゃんのお母さんは、「ありがとうございます。」とうれしそうに笑っていました。ぼくも、(よかったなあ)とほっとしました。

だけど、ぼくの気もちは少しもやもやしていました。ひろってあげたらもっとすっきりしたのかなあと思いました。

別の日に、お母さんと一緒にスーパーに買い物に行きました。レジでお会計をしている時に、ぼくたちの前にいた人が自動せい算機にお金を入れていたら、チャリン！とお金が落ちた音がしました。落とした人はおなかのところに赤ちゃんをだっこして、ひろうのが大へんそうでした。店員さんもすぐにひろおうとしたらせまい場所にあって取れなくて、

「ちょっとお待ちくださいね。」といって他の店員さんと呼ばうとしていました。ぼくは小さい手だったからすぐに取ってあげたら、落とした人と店員さんが、

「ありがとうー!!」と笑ってよろこんでくれました。とつても恥ずかしくなったけどすっきりした気もちになりました。ぼくはきつと、「ありがとう」と知らない人に言われるのが恥ずかしかつたと思う。だけど気がついたら自然に体が動いてひろってあげていました。こんなに気もちが良くなつたから、恥ずかしいことじゃないんだと思いました。

これからも困っている人がいたら、進んで助けてあげようと思いました。

銀賞 中学生の部

道路上でのやさしい心

静岡市立蒲原中学校 三年
大沼 恵

車がたくさん通っている道路の信号が赤に変わり、車が次々と停止していきます。私は父と車に乗っていました。そのとき父は、前の車とかなり距離を空けて止まっていました。「つめないの?」と私が聞くと、父はこう答えました。「こうやって道を空けておいて、左の道から車が来たときにすぐに入れるようにしているんだよ。」

私は気づきさえしませんでした。車一台ほどしか通ることができないような、左側にある小さな道。少しするとその道の奥から車が一台、ウインカーを点滅させながら止まりました。そして、私たちの車の前に入っていました。すると、その車がライトの両方を点滅させ、やがて信号が青になりました。そのとき父がやけに嬉しそうな顔で「ほらね。」と言うので、私もな

んだか嬉しくなりました。ライトの両方を点滅させているときは、車を止めるときだけでなく、うしろの車に感謝の気持ちを表すという意味もあるということをし、私は昔父に教わりました。だから父は、左の道から来た車が自分の車の前に入り、感謝の気持ちを表す光を照らしてくれたことが嬉しかったのではないかと思います。自分の小さな思いやりを、誰かが受け取ってくれる。「ありがとう」って言うてくれる。ささいなことだけれど、人から感謝されることは、こんなにも人を幸せにできるんだなと思いました。

けれど、私はふと疑問に思いました。私は運転ができないから知らないだけで、大人の世界ではこれが常識なのか?と。

しかし残念ながら、そんなことはありませんでした。赤信号で車が止まっているとき、私たちの車はウインカーを点滅させていました。しかし、信号が青が変わっても、譲ってくれた車はありませんでした。実際、道を曲がろうとしている車がいたら譲らなくてはいけないというルールはありません。けれど父のように、小さな思いやりを持って行動するだけで、道路の雰囲気も、人の心も、あたたかくなると思います。

今の日本では、煽り運転をする人や当たり屋など、みんなが使う道路の中で人に不愉快な思いをさせる人たちがたくさんいます。そんな中でも、交通事故を起こさないように、一人一人

が思いやりの心を持って運転することが大切だと思いました。私もいつか、車を運転する日が来ます。そのときは、ただ何も考えず運転するのではなく、父のように道路での小さな思いやりを忘れずに走りたいと思います。だから私は、こんな小さなことでも忘れず心に刻み、大人になります。

コロナ禍の中で感じた「親切」

静岡市立豊田中学校 三年

櫻井 ひらら

新型コロナウイルスが広がってきて、みんなマスクを常に着用をしているという世の中になりました。子どもも、大人も、高れい者や障害を持つ人もです。

この前、駅で待ち合わせをしていた時のことです。前を通ったおばさんが、通行人に手話で何かを言っていました。聴覚障害を持っていて人なのだろうと私は思いました。そして手話は、手だけでなく口を動かすことで伝えられているそうです。しかし、コロナが流行していて、マスクを外すことができないので、その女性は困ったようにずっと手話で通行人にうたったえかかけてい

るようでした。その通行人も何を言われているのかがよく分からず、終始困ったような表情をしていました。やがて、女性はあきらめたように通行人の人に会釈をして去っていきこうとしたときに、通行人の人が「少しだけマスクを外してしゃべってみて下さい。」と身ぶり手ぶりで伝えていました。すると女性は感染予防のためか、口パクと身ぶり手ぶりで話を伝えていました。すると伝わったらしく、女性も通行人も笑顔になってそれぞれの方へ歩いていきました。私は、相手に対して嫌な思いをさせないようにマスクを外さずに伝えようとしていた女性や困っている女性のことを考えて「少しだけでも外してみして下さい」と声をかけた通行人もどちらも相手が不快にならない、そして相手のことを考えていたのでとても親切心にあふれていると感じました。

今、コロナ禍という状況の中で、不便なことや困ってしまったことが多くあると思います。この女性は気づいてもらえる人がいたけれど、マスクをしていたり、ソーシャルディスタンスをしていたりすることで困っている人に気づきにくかったり、改善する方法が見つからなかったりなどすることが増えているかもしれません。そのようなときに気づいてあげられる「親切心」がもっと大事になってくるのだと考えます。

今もまだコロナウイルスが流行をしています。このように

困っている人が減るといいなと思います。このような状況であるからこそ助け合って、「親切心」をだれもが持ち、だれもが生きやすいような、そんな世の中になるといいなと思います。このことで、親切にすることはだれにとっても良いことだと改めて感じたので「親切心」を私も大切にしていきたいと思いました。

「未来へ繋ぐ」

静岡市立清水第六中学校 三年

望月 このみ

去年の冬、私は他校で行われた部活の練習試合から、同じ部活の友達二人と一緒に自転車に乗って帰っていた。その日は少し風が強く吹いていた。横断歩道を渡り、曲がり角に入ったところで、友達の自転車のカゴに入っていた帽子が風によって吹き飛ばされてしまった。私たちは自転車を道路脇に止め、帽子を拾った。その時、すぐ隣にあるバス停に居たおばあさんが、私たちに時間を聞いてきた。私たちは時間を確認し、午後四時過ぎだと伝えた。時間を聞いたおばあさんは、すごく悲しそう



銀賞

な顔をした。心配になった私たちは、事情を聞いた。おばあさんの話によると、その日の午後五時から、知り合いの方のお通夜があり、現地までバスで向かうということだった。だが、時間を私たちに確認し、いざバスの時刻表を見てみると、次に来るバスは午後四時五十分頃だった。現地までは遠いため、そのバスに乗ったとしても間に合わないし、何よりまだ五十分も待たないといけない。おばあさんのことが心配でならなかった私たちは、一度家に帰ることを勧めた。おばあさんはそれに賛成し、礼を言ってその場を立ち去った。立ち去る様子を見ていた私たちは、おばあさんの足が不自由なこと、荷物が明らかに重たそうなことに気づき、すぐに自転車をおしながら追いかけた。そして、荷物を預かり、おばあさんの歩くスピードに合わせて私たちが歩いた。おばあさんから何度も何度も「ありがとう」と言われた。歩きながら色々なことを話してくれた。まるで、私たちが孫だというように接してくれて、ありがたかった。みんなが笑顔なのも嬉しかった。おばあさんの家に着く途中のコンビニで、「何か礼をさせて。」と言われた。私たちは礼をもらうためにしたことではないので、何度も断ったが、おばあさんの必死さに根負けし、一人一つ、紙パックのジュースを頂いた。店を出てすぐに、おばあさんの家に着いた。何度も頭を下げられ、逆に私たちが申し訳なくなりました。頂いたジュース

は、普段から飲んでいる物と同じはずなのに、何だか全く違う物のように感じた。私はなぜか、困っている人に遭遇することが多い。迷子やケガをしているおじいさんなど、結構な大事だ。だが、自分が助け、その人たちが安全だと分かると、こちらがものすごく安心する。そしてものすごく嬉しい。困っている人は減ってほしいし、言ってしまうえばいなくなってほしい。けれど、それはきつと難しいから、その人たちを自然と助けられるような親切な人々で、いつか世界中があふれかえってほしい。それもきつと遠い未来になってしまうと思うけど、少しずつそんな素敵な未来に近づいてほしい。私はその一歩として、これからも親切心を忘れず、困っている人を助けるという大切なことを未来へ繋げていく。

